

〈随想〉国文学会の活動について

島本, 昌一 / シマモト, ショウイチ / SHIMAMOTO, Shoichi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

108

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

2001-07-14

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020180>

国文学会の活動について

島本昌一

戦後の日本文学誌要復刊や国文学会の活動、並びにその名称についての意見を求められた。かつて誌要について調べ、報告したことがあるからであろう。確かに戦後の復刊や大学紛争後の再刊等の準備会には出席していたように思うが、殆ど何も記憶に残っていない。従って余り役に立ちそうにもないが、学生時代の回想も交え、漫然と記しておきたい。遠くなったとはいえ、まだ戦後の事を記憶しておられる方は多く、間違いは正してくださいさるだろう。

機関誌に関する準備会は、たしか昭和三一年前後、多分、以後であったと思う。旧大学院の一室で、当時の主任教授であった近藤忠義先生を中心に六、七名の方が集っていた。司会（小原元先生であったか）も立ててあったように思うので、雑誌名、学会名、刊行予定日等、一つ一つ確認していったのであろう。多少記憶があるのは、執筆候補者を挙げる段になって多くの人が発言したからである。最後に先生が、卒業した人達はよくがんばっている。皆を元気づけるためにも早く刊行する必要がある。

。現実には極めてきびしいので、少々研究が進まなくても小さくならず、胸を張って大学に来てもらいたいものだ、といった意味のことを言われたように思う。

戦後、創作や評論の雑誌も幾つかあった。研究誌では「文学研究」（日本文学研究会編）という雑誌が昭和二八年頃に刊行されていた。これは現在も続いているが、その一、二号ぐらいは単なる同好の会の雑誌ではないような印象もあったが、準備会で話は出なかったと思う。戦前の機関誌として名高い「国文学誌要」（国文学会編）を継承する事に、何の疑問も持っていなかったのである。

ただその雑誌の実体については伝承以上には分かっていた。そこで日本文学科創立四十周年の時、多くの卒業生の協力をいただき、ほぼ完全に雑誌と会報を集め、理解したことを本誌一六号に記したのである。それに依ると、誌要が刊行されたのは昭和八年より一年の四年間に過ぎず、図書購入費を割いて刊行されていたらしい誌要は、三〇頁前後の特に見栄えもしない小冊子であった。しかしながらこの新進気鋭な論評を象徴しているかのような「誌要」という名前の小冊子のすごい所は年五回、休刊直前は六回の刊行を予定して矢継ぎ早やに世に送られたことである。実際はそのように多くは出されなかったが、それでも極めて激しい活動であり、立ちどころに研究者や学界の注目を集める事になった。そして昭和一二年には、国文学者のみでなく様々の分野の学究との連携のもとに「文芸復興」（二三〇頁前後）という月刊誌を創刊せしめる原動力ともなったのである。

私は前に調べた時、休刊の年次がはつきりと握めず誌要は「文芸復興」に発展的に解消したとも取れそうな記述をしたのであるが、最近「一九三八・法政大学国文学会々報」を披見することが出来て、事情が明確になった。即ち昭和一二年になって創刊された「文芸復興」のため、学会員も多忙であった事は確かであるが、誌要の刊行を放棄する意図はなく、また「文芸復興」も矢継ぎ早に刊行されたが、六月より十一月迄五冊を出して、誌要とほぼ同じ頃に休刊せざるを得なくなった事である。この雑誌は世の文芸復興を謳歌する風潮に対抗して生れたものであり、文芸を広く社会的視野で批判的にみる誌要ともども、弾圧が予想されての休刊であろう。この一九三八年・昭和十三年は、昨年亡くなられた小田切秀雄先生が入学された年でもある。一年生として会報の編集委員になられたが、実質的には二年前に休刊になった誌要は研究室にも置かれておらず、既にこの年には幻の雑誌であったと思われる。

しかし国文学会が真価を発揮するのは、雑誌休刊後であると思う。誌要四巻二号には「国文学と鑑賞主義」という近藤先生の論説がある。これは作品鑑賞の否定ととられ物議を醸して来たが、ここには先生の切実な主張があったと思う。戦争の激化とともに当時の言葉でいえば「銃後」の女性の問題がクロウズ・アップしてきた。学会員との協力で「日本の女性文化」という論集が編まれたが（刊行はおくれで一八年である）、そこで先生は、若い女性への書簡の形で、鑑賞主義が収斂する日本の趣味に寄りかかることが如何に危険であるか切々と訴えておられるのである。

そしてこういう考えを具体化したものが、昭和一四年から始まる「日本古典文学読本」（二五年の「日本文学入門」を含め一三冊）の編集であった。私はこれを戦争中に行なわれた大変質の高い抵抗であると思う。そこには戦争批判の言辞があるわけではない。代表的な古典作品に注をつけ、巻末に時局向きの作品鑑賞や解説ではなく、初心者正しい理解に必要な長大な研究篇のついた叢書であった。これらは時代を超えて戦後三〇年代の半ばまでは初心者がまず参照すべき文献であったところにも、その意義が分るだろう。昭和一八年続篇一二冊の刊行が始まり、一九年治安維持法で検挙されるまで活動は続いた。

以上、今日では忘れられている事であり、また国文学会の活動は先生を抜きにしては語れないので纏説してきたが、これらの活動は立場を超えて良心的な国文学者との協力なしでは可能ではないであろう。このフロン・ポピュラーの活動は先生の本来的なものであったと思う。国文学会という名称は先生以前からあったものである。それを先生は戦時中も、戦後も変えようとはされなかつた理由もこの辺にあるのではなからうか。戦後の「進歩的」学者の中には、国文学者と云われるのを嫌い、国文学と一線を画そうとする人が多かったが、先生はむしろその国文学の中に留まり、古い体質を内から変革しようとされたのであろう。

これが正しい理解かどうかは知らない。しかし私はそのように受けとってきたのである。昭和二一年在野の研究団体である日本文学協会の設立も先生の影響下で成立したが、そこにはどのような組織論があったのか、本学には協会員も多いので、教

えていただきたいと思う。

私が先生の教えを受けたのは昭和二〇年代の終りであったが、当時は注釈書も少なく、演習は国会図書館に日参しても手に余ることがあった。時々ご自宅の書庫を解放していただいたが、国文学的基礎もおろそかにされない演習であった。

思うに先生が東京帝国大学に入学されたのは、関東大震災の翌年である。六高時代はドイツ演劇に熱中され、その道に進むものと期待されていた先生が自国文学へ進まれたのには、大震災が明るみに出した日本の現状と思想状況が大きな影響を与えたのであろうと思う。当時、図書館の典籍も校舎も灰燼に帰し、敗戦直後と同じくバラックの校舎で授業を受けられたと思う。譬喩的にいえば、先生には伝統に囚われない自由でラディカルな発想と共に、失われた典籍に対する深い愛惜が分ち難く共存していたのではなからうか。演習では資料の調査や共同研究のあり方・意義について情熱を込めて説かれた。

戦後の国文学会継承を私的な回想を交えて記したが、以上のことは、これからの国文学会のあり方を規制する意図で書いたものではなくない。国文学会という呼称は余りにも旧いという意見があるという。理解できることであるが、現在、本質的な討議もなままに改名は急がねばならないことであろうか。

土木科（工学部）という名称が土方養成的イメージがあるから人気がない、国文学科というのは旧くさくて学生が集まらないといった笑えない現実が生れてもどれくらいになるのである、日本という名称もスマートでないから、国際とか、文化とかの枕を冠しようという改名・改組の流行を入れたら一〇年

を遙かに超すであろう。国文学会という組織は、本学でかつて教えた者・学んだ者と現在を絶えず繋ぐ組織である。現在の人が当然と思っている事でも少し旧い人は分らない。本誌には研究論文のほか、エッセイ欄があるから、大学が現在置かれている状況や、日本文学科がどう変っていつているか、或は未来への試論がもっと必要であると思う。のんびりと誌要を見ていたら、ある日、突然、日本文学科が消えたり、大学がなくなったとしても何の不思議もない時代である。

本文中に記した一九三八年の国文学会々報は大変珍しい。この年、小田切秀雄先生を含め七名の入学者があった。内、一名は当時では珍しく女性であり、一名は朝鮮籍の方である。授業は近藤忠義、片岡良一、藤村作、西尾実、長沢規矩也の諸先生が担当。国文学会は会長近藤忠義、副会長片岡良一、顧問には谷川徹三、林達夫、城戸幡太郎等著名な十六人の学者が並ぶ。総会の外、学会活動として文芸学、古典研究、現代文学批評会があった。曜日を異にするので、全員が出席したのであろう。様々な作品が取り上げられたようだが、文芸学はデイルタイとある。

(しまもと しょういち・文学部講師)

